

八つ当たり？された赤塚トンボ池がトホホ

2005 年 1 月

新年号なので報告したくなかったけれど、12月にきれいにした赤塚トンボ池があれいています。「虫の居所の悪かった方」が八つ当たりしたようです。看板をはがし、池に放り投げ、柵もだらしく曲がっています。自然材でできた池の施設も年数を経てもろくなってきており、意図的な破壊に対して抵抗力がありません。

トホホのその2は、湧水が途中で消えて池に入っていないこと。

2004年は、いやになるほど渇水が続き、秋からは台風が次々と上陸してどしゃぶりになる極端な降雨状況でした。その土砂降り雨が湧水となって池にさらさらと流れ込むことを期待したのですが、逆に大雨により泥が流出したようで、傾斜のゆるい水路に泥がたまって水が流れない。12月に徹底的に水路の泥さらえをし、かろうじて池に水が到達しましたが、今はまた空堀状態です。原因は、流れの緩い水路の勾配をとることがむずかしいのと、水路の漏水もひどくなってきているためと思われます。

つまり7月途中から湧水はほとんど途絶えたままということです。

池は夏ほど干上がっておらず、涼くなってからアオコモ消え、水も透明です。10月のフィールドワーク時、講師の田邊さんに「浄蓮寺下の池に比べて足りないものがある」と言われ、ずっと考えてきました。赤塚トンボ池は、さまざまな制約の中で、やっと実現した自然を取り戻す場所です。以前池があった場所なのに、分厚い防水シートを張らなければならない自然の池には、梅まつりの舞台用の奇妙な土台が残っている。粗朶を入れ植物を植えた箱舟には、やっぱりヤゴがいて、トンボ池の環境には「植生の復活とザリガニ対策が決め手」ということまでは証明されたが、池の水位が下がって、植物のない箱舟はやはり人に違和感を与える。いたずらは絶えないし、ザリガニもいるし、大きなコイもいる。たった一人の行為でも状況が変わってしまう自然、問題は多いことは確かですが、自然を取り戻す場所として、もう一度その価値を見直す時期に来ているのではないのでしょうか。